

Dream Factory
アート＆デザインの机上仕事場。

Patrick Blanc

パトリック・ブラン ●植物学者、アーティスト

室内には、植物が茂り、鳥が飛び、床下には魚や亀/
都会の仕事場に熱帯雨林のエコシステムを再現。

シダやツタ、コケなど世界の熱帯雨林に生息する植物200種以上が繁茂するパトリック・ブランの仕事場。熱帯魚や亀が生息する流過の天井をガラス張りの床として、その上に机を配置。

My Desk, My Sanctuary 062-063

photo / Yoji Ono, Issei / Chiyo Sogawa, edit / Kazumi Yamamoto



水棲上層の藻類は約10cm。その水層の光の密度に驚かされる。水の一部は透水性のある金網を用いて、100%の光を遮る。そこから驚くような水の音もする。ここは仕事場だ。

My Dear, My Sanctuary 064-065



トロピカルな空間を演出する色鮮やかな南国の小鳥12種も、葉やコケ、枝などを材料に制作し並べる。動物マドレーヌを混ぜた平作りの餌を与える。



床下に広がる大水槽。ガラス張りになったサイドから覗けば、まるで熱帯水産物。ガラス内側の壁は小魚がついていばむので、水槽内の掃除もほとんど不要なし。



家の完成時に母から贈られた机。PC作業をしたり、「植物の壁」の植物分布を画いたりする。足元は半中ビーターンダム。机上の必需品は、双眼鏡と方眼紙。



植物の壁を背に、片方の壁面は2階の天井まで続く巨大な書棚。水層をまたぎ安眠で丈夫な書棚は、観水時に使われて水田にも通ずるのだと僕は思う。

Profile



パトリック・ブラン

1983年生まれ。フランスCNRS（国立科学研究所）の熱帯雨林植物研究者として勤めたのち退職。発見した新種も多数。水棲内の図録作りと植物の共生に真摯に取り組む。壁面をさまざまな植物で覆う「植物の壁」を完成。これまでに世界各地で300件以上のプロジェクトを手がけてきた。現在はインドのケンペコダ空港は多数のプロジェクトが進行中。

Draw Factory
アート＆デザインの仕事場

変化し続ける緑と動物に囲まれた、唯一無二の机。

金

底の深い木製の板を敷いた仕事机を「水に浮かんでいるような感覚がとてに入っている」とパトリック・ブラン。ここから図録を見れば、さまざまな熱帯植物が生い茂り、その間をカワフナや小鳥が飛び交っている。ガラスの床下に視線を移せば熱帯の魚が悠々と泳ぐ。これが「植物の壁」を世界中に出張させ、都市や建築の風景を塗り替えてきた現代の植物学者の仕事場だ。

十数年前に購入した家には、外に開けた窓や扉はない。中央に吹き抜けはあるが、4面を壁に囲まれた、ロフト付きの2階建てだ。が、これこそがパトリックが求めていた熱帯雨林の森を自宅に創るにふさわしい建築的環境だった。深い森の上部から差し込む光を頼りに植物が繁茂するジャングル。そんな採光を再現し植物の壁を造った。そして息を吐く魚が養分を生み出す。豊かな過水が

循環する巨大な水層を仕事場の床下に構築した。「水草が水を浄化する。魚のフンが植物を育て、魚の死骸を南米の鳥が食べる。水辺に生きる多様な生命がはかを生かし、はかに助けられて生きる。そんな生態系を作ったかった」と、パトリック。少年の頃から半世紀にわたり研究を重ねた末の、仕事場に不可欠なエコシステムの完成だった。机上には、PCと筆記用具、眼鏡。そして、いつでも植物や小鳥を眺められるようにと、双眼鏡と記録用のデジタルカメラを用意している。「ここでは音楽はかけない。小鳥のさえずりがBGMだからね。仕事の息抜きは生き物たちを観察すること。あえて僕のデスクの端点は、と聞かれば、小鳥のフンが時々落ちてくることかな」熱帯植物に囲まれて心静かに机に向かう様子をこの生命に満ちた仕事場そのものが包み、生態系の一員として受け入れているかのようだ。